

元会長 速水 格先生のご逝去を 悼む

加瀬友喜



図. 1996年11月, 仏領ポリネシアのライアテア島での海底洞窟調査の折に, 筆者が撮影. 奥は斎藤道子さん.

速水 格先生の訃報は, 私にとってまさに青天の霹靂であり, また, これほど悲しい知らせはなかった. 本学会元会長の速水先生は, 平成23年5月27日, 79年の生涯を閉じられた. 横浜国大での古生物学会例会の折, 遅れていた先生の喜寿のお祝いを横浜中華街で執り行う計画があった. 先生からは, そのような堅苦しい形式張った会ではなく, 皆の楽しい交流の場にしてほしいとのご提案をいただき, 先生と親交のあった方々, 門下生一同皆その日を楽しみに待っていた. しかし, その後先生の体調が優れないとのご連絡があり, 急遽会は延期となった. その時は直ぐにお元気になられ, 改めてこの会を開くことを誰しも疑っていなかったのではないだろうか. 速水先生は, ご自身の事で他の方々の仕事の妨げにならないよう常日頃より腐心されていた. 東大退職の折には, 通常は弟子が準備すべき先生の御略歴と業績目録の作成をご自身でなされ, 「珊瑚樹の道」と題する小冊子を纏められた. その中には先生の若き日の思い出, 恩師の小林貞一先生, 先輩や同級生らとのエピソード, 先生ご自身の研究の遍歴, また弟子達への貴重なご助言などが綴られている. 先生がご病気のことをほんの僅かな親しい友人にのみお伝えになっていた事実を, 告別式で初めて知った. これも先生の門下生らへのご配慮であろうか. 誠に痛み入る次第である. 速水先生は昭和8年に東京でお生まれになった. 戦時中は三重県の尾鷲に疎開され, そこで食料確保も兼ねた紀州の海での釣りや磯採集をされ, その折海岸に打ち上がる美しい貝に魅了されたとのこと. また, その後東京の成蹊中学, 高校に進学され, そこで

出遭った生涯の友となる森 俊人氏(故人)に感化され, 貝の世界にのめり込まれていったことなどが「珊瑚樹の道」の中に綿々と綴られている. かつて千葉県銚子の海は, 深海底引き漁の魚屑が岸壁に放置されており, 貝の収集家であれば一度は訪れる有名な採集地となっていたが, 速水先生はその開拓者といえる. 高校生時代に森氏と共に強烈な腐敗臭を放つ貝を汽車に持ち込んで周囲の乗客から苦情を受けたこと, 著名な貝類学者の故・櫻井欽一氏を銚子に案内された逸話は, 親交があった方や門下生なら一度は耳にされたであろう. しかし, この高校生時代の貝の趣味が, 化石貝類の研究に進まれる直接の契機ではなかったという事実は意外である.

先生は1952年に東京大学教養学部理科二類に入学され, 2年後には地学科地質学鉱物学課程に進学された. 古生物学の研究は, 小林貞一教授の指導の下, 進級論文として新潟県小滝川流域の下部ジュラ系・来馬層群の調査の折りに二枚貝化石を発見したことに始まる. 小滝川流域は険しい山岳地帯で, 述べ40日に及ぶ進級論文での調査では大変な苦勞をされたと伺っている. 真偽のほどは定かではないが, お一人での調査中に大きな熊に遭遇され, 恐怖のあまりに東京まで逃げ帰られた, との噂もある. その後, 大学院では小林貞一先生の第2講座に所属され, “化石横丁”と呼ばれていた理学部2号館1階中廊下にある研究室で, 他の大学院生たちと共に猛烈な勢いで論文を書かれていたようだ. その中でも速水先生の論文数は群を抜いて多く, 博士の学位を取得した1961年までに40編もの論文を書き上げられている. そんな先生のお名前を文字で, 速く見て書くことから“ハヤミカク”と呼ばれていたことは, 東大の古生物関係者の間では有名な話である. 「珊瑚樹の道」のなかでは当時の論文を粗製濫造とご謙遜されているが, 到底凡人の出来ることではない. 理路整然と思考を組み立てる速水先生の傑出した才能の成せる技であろう.

学位取得後, 東大で1年半の学術振興会の特別研究員として過ごされた後, 松本達郎先生に請われて九州大学理学部に助手として奉職され, そこで10年間を過ごされている. 先生の“ハヤミカク”はその後も健在で, 下部白亜系二枚貝類の記載分類の3部作は総計306頁, 66図版の大作である. また論文も, 松本先生の影響を受けてか, 以前にも増して洗練された感がある. この下部白亜系二枚貝の3部作は, 私自身の学位論文の下部白亜系の腹足類の分類論文を書くに当たり, 大いに参考にさせていただいた. しかし, この頃の先生は当時の古生物学研究の主流であった記載分類学と化石層序学から脱却し, より普遍性のある研究課題の模索に奮闘されたと聞き及んでいる. 折しも当時は地球科学や古生物学の大変革期であった. 学生に対する古生物学実験のプログラムとして開発された集団標本を用いた化石および現生貝類の変

異や相対成長の理論と解析法は、形態解析の常套手段として今でも我が国の古生物研究に広く用いられている。九大時代のこの模索の中で、ヒョクガイとの出会いがその後のご研究の方向を決定づけた、と話されていたことを思い出す。ヒョクガイの放射肋の2型に関する研究は、化石に集団遺伝学的手法を取り入れた革新的なもので、その論文は1973年にJournal of Paleontology誌に発表された。その当時、日々興奮に満ちた研究生を送られていた様子が「珊瑚樹の道」の中で綴られている。

昭和48年2月に、速水先生は東大総合資料館（現在の東大総合研究博物館の前身）の地史古生物部門の助教授として戻られた。私が横浜国大から東大の修士課程に進学したのは昭和51年4月だが、ちょうどその頃、先生は1年間の欧米での在外研究から戻られたところだったと思う。当時、日本で最も進歩的な古生物学者の一人である先生に初めてご挨拶した時にはとても緊張した。先生は思いのほかシャイな方で、その時に何となくぎこちない会話を交わしたことを記憶している。地史古生物部門は総合研究資料館の2階にあり、標本庫と広い作業部屋、薄暗い廊下から入る先生の小さくて薄暗い居室と、古生物学会図書で埋め尽くされた小部屋の4部屋があった。先生の居室は蔵書や別刷りでほぼ埋まり、そこで仕事をされることは殆ど無かったように思う。いつもは明るくゆったりとした作業部屋に居らして、お気に入りの古めかしくて頑丈な木製の大きな机で仕事をされていた。この部屋で先生が使われる研究機器といえば大型写真撮影装置（ニコンのマルチフォト）とIBMのタイプライターくらいであった。先生は講義と会議がある時以外は、何時でも作業部屋に居て仕事をされていた。一日中タイプライターに向かい、一本指でけたたましい音をたてて論文原稿を打つお姿は、今でも私の目に焼き付いている。

速水先生の総合研究資料館時代、古生物研究とは別に、もう一つ重要な貢献をされたことを忘れてはならない。それは、理学部地質学教室の花井哲郎先生の発案による中・古生代古生物標本カタログを出版されたことである。市川健雄さんと共に埃まみれの化石標本と論文の図版との照合に大変苦勞されていたのを思い出す。当時大学の古生物標本のキュレーティングの重要性は古生物学界でも広く認識されていたが、現実にはどこの大学でも、多忙な大学業務の傍ら古生物標本のキュレーティングをすることは容易なことではなかったようだ。そのような状況の中で、国内の他大学に先駆け実践されたことは、古生物学研究への多大な貢献であるといえる。東大古生物標本のキュレーティングとカタログ化はその後も市川さんが中心となって引き続き進められた。現在は佐々木猛智さん、伊藤泰弘さんや棚部一成さんらのご努力により、東大総合研究博物館のウェブミュージアムで他の多くのコンテンツと共に公開されている。先生もご覧になり、さぞお喜びになっていたことであろう。

1984年4月、先生は花井先生の後任として地質学教室の第4講座を引き継がれ、理学部教授とられた。その後1994年に退官されるおよそ10年間に、現在古生物学界で活躍する多くの後進を輩出されている。私自身はその頃すでに科学博物館に勤務していたので当時の事はあまり詳しく知らないが、講座所属の大学院生は分類群も手法も異なる様々なテーマに取り組んでいた。私が大学院に在籍していた頃も同じだったが、先生は大学院生に対して細かな指導はなさらなかった。先生によれば、それぞれが独自に開眼し、工夫して研究することで研究意欲が高まり、結果的には良い研究成果を生み出すというのである。それも確かだと思うが、それ以上に、確固とした哲学を持ち、いつも新たな研究に挑戦される先生の真摯なお姿こそ、学生に対する最大の指導であったと思う。この頃、ツキヒガイやタカハシホタテなど、ホタテガイ類の機能形態に関する斬新な研究を発表されている。退官後の1998年には、先生のこれまでの研究のご業績と学会へのご貢献に対し、松本達郎先生以来となる学会賞（横山賞）を受賞された。退官後は神奈川大学理学部に移り、更に10年間に渡り教育と研究に当たられた。そこでの先生は東大時代とはかなり異なり、学生には懇切丁寧に接していたようだ。特に女子学生には(?)。それを見聞きした東大時代の門下生は、“自分にはこんな指導をされなかった”と冗談交じりに不平を漏らしていた。神奈川大学では二枚貝類の分子系統に挑戦され、教え子の松本政哲さんと共にホタテガイ類の系統に関する論文を出されている。これが先生の最後の研究論文となった。恐らく、神奈川大学時代の先生は、古生物学の教科書の執筆に集中されていたのではないと思われる。それは「古生物学」と題する2008年に東京大学出版会から出版された単行本である。この本は日本の古生物学界に数々の金字塔を打ち立てた速水先生の半世紀にわたるご研究の集大成ともいべきものである。

東大時代の門下生の中で、先生との思い出が最も多いのは私かもしれない。それは私が先生の東大時代の最初の門下生であることにもよるが、何よりおよそ10年間に渡り海底洞窟の生物の共同研究をさせていただいたためである。実はこの研究は、先生のホタテガイ化石標本採集の手伝いの際に北海道今金町の宿で交わした些細な会話が発端であった。長万部の駅に先生を車でお迎えし、今金町の貝殻橋などで標本を採取した。正確な場所は覚えていないが、化石産地のひとつでワタゾコツキヒを採取した。その晩、宿でその話となり、たまたま私が沖縄の海底洞窟堆積物から見つけたワタゾコツキヒのことをお伝えしたら、“この仲間がそんな浅い所にいるはずがない”とおっしゃられた。東京に戻り、再度見直したところ、ワタゾコツキヒはもちろんのこと、他にも奇妙な微小な貝類がびっしり入っていることに気づいた。そして、その後沖縄を皮切りに、東南アジア、ミクロネシア、ポ

リネシア，インド洋，ハワイ，はたまたカリブ海の熱帯の島々での調査に同行していただいたのである。調査中の先生はいつもはつらつとされ，どんな荒波でも船酔いをせず，船に弱い私はどれほど助けていただいたことだろうか。また，調査の合間には何処であれ磯や砂浜を歩き回っては貝を集められ，まるで若き日の先生のお姿を見るかのようにであった。先生の気さくで温かなお人柄のお陰で，いつも同行していただいた沖縄のダイバーの方々共々，実にすばらしい調査をすることができた。こんなに楽しい思い出を残していただいた速水先生に，厚く御礼を申し上げたい。

先生のご高著「古生物学」のカバー表紙には，先生の

お気に入りの一品であろうか，タカハシホタテの見事な標本の写真が飾られている。恐らくこの標本は，北海道滝川の空知川河床で，先生と安藤寿男さん，岡本 隆さんと私の4人で3日かけて採取した標本の一つと思われる。先生は何度もこの標本を手にとられ，あれこれ思いを巡らせていらしたことだろう。この標本の縦肋は，先生の手の脂で艶やかになっている。この表紙を見るたびに，先生の古生物研究への熱い思いを感じるのは，私だけではないだろう。最後に，これまでの速水先生のご業績と古生物学へのご貢献に敬意を表すると共に，長年にわたり温かいご指導を賜ったことに心より御礼を申し上げ，謹んで先生のご冥福をお祈りする。

